

『暮しの手帖』第1世紀1号～100号の 手描き題字をめぐって

守山恵子

はじめに

福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科では、2017年末に、『暮しの手帖』を教員や学生の共通研究テーマとして取り上げることにした。そのきっかけの一つは、1人の学生が1冊の古い『暮しの手帖』を手に入れ、それをある授業の課題に使ったことである。またもう一つは、学科の複数の教員がその話を聞いて、『暮しの手帖』第1世紀の一部を研究のために提供できそうだと伝えてくれたことである。『暮しの手帖』は研究材料としてさまざまな切り口が考えられ、それぞれの教員が専門性を活かした研究もできるだろうということやメディア・コミュニケーション学科らしい研究を学生にも経験させられそうだとことから、学科の共通テーマとして位置付け、2017年度に『暮しの手帖』第1世紀100冊（第1号～第100号）を購入し、研究を始めることとなった。本稿は、その研究報告の1つである。

本稿では、まず『暮しの手帖』創刊（1948年・昭和23年9月）当時の状況を同時代の『婦人公論』（1916年・大正5年1月創刊）、『主婦之友』（1917年・大正6年創刊、2008年休刊、後ムック本として『主婦の友 Deluxe』）、『婦人倶楽部』（1920年・大正10年10月創刊、1988年・昭和63年4月休刊）、『主婦と生活』（1946年・昭和21年5月創刊、1993年・平成5年3月休刊）の4誌と比較し概観する¹。次に、手描き文字で描かれた『暮しの手帖』という題

字に注目し、その特徴について、他誌とも比較しながら論じる。さらに、今後、学生に取り組みさせる研究テーマのいくつかを提案したい。

1. 『暮しの手帖』創刊の頃

『暮しの手帖』（創刊から21号までは『美しい暮しの手帖』）は花森安治と大橋鎮子によって、第二次世界大戦後、1948年（昭和23年）9月に創刊され、現在も発行されている雑誌である。一般社団法人日本雑誌広告協会の「雑誌ジャンル・カテゴリ区分」最新表（日本雑誌広告協会、2018）²によると、『暮しの手帖』は、性別：女性、大分類：ライフカルチャー、ジャンル名：生活実用情報誌、カテゴリ：生活情報全般に分類されている。

『暮しの手帖』が創刊された1948年は、第二次世界大戦直後、連合軍司令部が東京に置かれており、三鬼（2010）によると、新聞遵則により連合軍最高司令部検閲部などに雑誌納本が義務付けられていた時代である。『婦人倶楽部』の裏表紙には、「MADE IN OCCUPIED JAPAN」と記されている。1948年の前後数年には、それまでの女性誌に加え、多くの女性誌が復刊、創刊された。本稿が『暮しの手帖』と共に取り上げる『主婦之友』『婦人倶楽部』は戦前から続いており、『婦人公論』は戦後復刊され、『主婦と生活』は戦後に創刊されたどれも月刊雑誌である。大戦直後は、印刷用紙不足もあったと考えられ、『主婦之友』の裏表紙には「回読によって主婦之友はできるだけ多くの家庭で御利用願います」とある。実際に回読されていたのだろうということが、住所氏名が書き込まれているものが散見されることからわかる。1948年秋には用紙不足がある程度解消しはじめたようで、いくつかの雑誌で発行部数が増えている。たとえば、『主婦之友』は1948年9月の6.5万部

¹ これら4誌は、三鬼（2010）による戦後の女性誌の発行部数一覧で発行部数が多かったものと、当時の「四大婦人雑誌」（『主婦之友』・『婦人公論』・『婦人倶楽部』・『婦人画報』あるいは、『主婦之友』・『婦人倶楽部』・『主婦と生活』・『婦人生活』）と言われているものの中から選んだ。

² <http://www.zakko.or.jp/subwin/genre.html>（2018.12.8アクセス）

『暮しの手帖』第1世紀1号～100号の手描き題字をめぐって（守山）

から10月には36万部と発行部数が5倍以上に増えており、『婦人倶楽部』は9月の35万部から10月には50万部になり、『婦人公論』も1948年10月の3.5万部から11月には5万部に増えており、その後もこれら3誌は、少しずつ増加している³。『暮しの手帖』はこの印刷用紙不足が解消に向かいはじめた頃に創刊されたことになる。創刊号の発行部数は1万部であったが、最終的には版を重ねて36万部となった（酒井2011, p. 147）。発行は他の4誌と違い季刊である。

2. 創刊時の『暮しの手帖』と他の女性誌4誌

『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦人公論』『主婦と生活』の共通点を1948年10月号で、『暮しの手帖』との比較を念頭に見ておきたい。

2-1. 雑誌のサイズと値段

4誌はどれもA5（21cm×15cm）サイズ、ページ数は1948年10月号を例にとると、どれも64ページである。たとえば『婦人公論』は、真ん中1か所をホチキスで止めた平とじで、表紙で右綴じにくるんでいる。この製本の方法も、本の厚さが約4mm程度だというのもほぼ共通している。値段は35円から50円である⁴。

2-2. 表紙と裏表紙

1948年10月号では『主婦之友』は宮本三郎、『婦人倶楽部』は伊藤悌三、『婦人公論』は岡田謙三、『主婦と生活』は寺内萬治郎という画家たちによって女性の顔が描かれている（図1）。ただし、表紙に画家のサインはなく、目

³ 三鬼（2010, p. 30）がブラング文庫所収資料を基に作成した発行部数表による。

⁴ 日本銀行ホームページの消費者物価指数によると、2017年の指数は、1948年の10.2倍である。雑誌の値段は357円から510円ということになる。（<https://www.boj.or.jp/announcements/education/oshiete/history/jl2.htm/>, 2018. 12. 24アクセス）

次に名前が記されてる。裏表紙は、『主婦之友』以外は、化粧品や薬、電球の広告が4つ、あるいは6つ掲載されている。同じ会社の同じ製品の広告（たとえば株式会社近藤商店のヘチマコロン）であっても、雑誌によって絵やうたい文句が違う。ただし、商品名のロゴタイプだけは共通している。同じ商品の広告を他のページで探してみると、やはり、絵や色は違っていても商品名のロゴタイプは同じものが使われている。『主婦之友』だけは、裏表紙に広告ではなく、神田維新号の鄭勇昌による「お惣菜向中華料理」を掲載している。

表紙の題字は『主婦之友』と『婦人倶楽部』は筆書体で縦書き、『主婦と生活』は明朝体で縦書きである。題字が縦書きの雑誌は、「十月号」という号数も縦書きになっている。『婦人公論』はデザイン書体で左から右への横書きである（図2）。『婦人公論』の題字は1945年ごろまでは右から左への横書きであった。中表紙に6つの広告が掲載されているが、そのうえの余白には、右から左への横書きで、「地方税治めて咲かせ自治の花」とある。1948年当時、横書きの場合、題字や広告はほぼすべて左から右へととなっているが、まだ、右から左へに書かれているものも残っており、横書きの方向が定着するにはしばらく時間がかかっていたと考えられる。

2-3. 内容

『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦人公論』『主婦と生活』それぞれの主な内容を目次から見よう。タイトルのみを記す。



(図1) 『主婦と生活』表紙



(図2) 『婦人公論』表紙

『暮らしの手帖』第1世紀1号～100号の手描き題字をめぐって（守山）

表1 『主婦之友』1948年10月号の主な内容

エッセイ, 写真 記事	老夫婦, ヘレン・ケラー女史を迎えて, 笑いの名所めぐり
衣服	秋から冬の婦人スーツとツーピース (作り方), 婦人ツーピースと帽子・ネクタイ・手提(作り方), カード式新型毛糸編物集(別冊), スーツとツーピースの実物大型紙 (特別付録)
食事, 料理	お惣菜向中華料理の作り方, ハイキング・運動会向おにぎり弁当の新工夫, 十月のお惣菜献立カレンダー
読み物, 小説他	娘さんと花嫁さんの結婚座談会, 連子して再婚に成功した体験, 人気者に訊く一僕の私の結婚条件, おぢいさん, 女の顔, キリスト物語, 短歌
漫画	ハナ子さん一家
生活情報	秋の投入れと盛花, 結婚礼法早わかり, 冬越し野菜の作り方秘訣, どの避妊法が一番よいか, 木造耐震住宅の設計
相談	愛児の盗癖に悩むお母さんへ

表2 『婦人倶楽部』1948年10月号の主な内容

エッセイ, 写真 記事	私の好きな娘さん, 夫婦の年輪
衣服	アクセサリーの魅力, 秋のニュールック, 洋裁と編み物新スタイル, 実用洋裁講座, 洋裁用語解説, 毛糸編み物, 秋の婦人子供服
食事, 料理	栄養たっぷりな秋のお魚料理, 上品なお菓菓子づくり方
読み物, 小説	愛情の渴れるとき, ある女の一生, 光は遠けれど, 結婚
生活情報	結婚式場めぐり, 野の草を取り入れた秋の生け花, 産褥の生理と母乳を出す法, 家庭菜園・十月の手入れ, 結婚新書 (別冊), 恋愛結婚判断 (別冊)

表3 『婦人公論』1948年10月号の主な内容

エッセイ, 写真 記事	ドアーを楽しく, われらの仲間, 巻頭言
読み物, 小説	婦人と社会の進歩, ドナウの流れとユーゴ, 台所と婦人解放, 現実と夢 (モード時評), 不実な洋傘, 細雪
生活情報	(座談会) 児童の純潔を守ろう, 新しい駆虫薬, ルポルタージュ物價改訂と私の家計簿, 歯痛

表4 『主婦と生活』1948年10月号の主な内容

エッセイ, 写真 記事	十月のことは、映画界うわさばなし、私の理想の男性、僕の理想の女性
衣服	人気スター私の好きな装いデザイン解説、七五三のお祝いに子どもの外出着、夢を盛るスタイル、新型毛糸編みもの集、毛糸と布地の接ぎ合せデザイン、なんにでも應用できる模様編みニューデザイン集（別冊付録）
食事, 料理	ピクニックおべんとう、十月のお惣菜
読み物, 小説他	詩・秋のこころ、正子・孝子を歌手に育てあげるまで、涙の対日放送、悔いなき結婚のために、第二の結婚、夜毎の夢に、短歌・俳句、家庭川柳
生活情報	よごれもののしまい方、朝・晝・夜のお化粧、美しい腰になるために、正しい性知識、結核は簡単に治せる、湿布のコツ

小説や読み物が主の『婦人公論』をのぞき、他の3誌が扱っている内容に大きな違いはなく、衣食に関することと生活一般に関わる情報、そして小説などの読み物が主である。どの雑誌にも主に巻頭に写真ページやカラーページが数ページある。

2-4. 創刊時の『暮しの手帖』

『暮しの手帖』は他の4誌より大きいB5サイズで創刊された。総ページ数は96ページである。雑誌そのものの厚さは約6mmである。使用されている用紙は『暮しの手帖』第50号によると、「本文の紙は、創刊以来、新聞と同じようなザラ紙でしたが、それを全部白い紙にしたのは、第31号からでした。」他の4誌もザラ紙が使われているが、他の4誌には、ページによる紙質のばらつきがあるのに対し、『暮しの手帖』にはばらつきがないように感じられない。サイズ、ページ数、紙質の点だけでも、他の4誌とは明らかに違いがある。1冊の値段は110円で、4誌の最も高いもの(50円)に比べ、2.2倍であるが、これは、4誌が月刊なのに対し、季刊であることを考えあわせれば、決して高くない。

表紙もまた大きく違う(図3)。花森安治が表紙を描いており、さらに題

『暮しの手帖』第1世紀1号～100号の手描き題字をめぐって（守山）

字と号数も花森安治の手描き文字である。「H」というサインも、図3の絵の右端の鏡と花瓶の間に書き入れられている。『花森安治のデザイン』（p.13）には、「暮しの手帖表紙原画」について「水彩、クレヨン、コラージュなど、様々な画材や技法を何でも試した。原画は、あとからタイトルや号数を入れるためのスペースを考えた構図になっている。」とある。題字は他の雑誌のように決まったものがあるわけではなく、題字そのものも手描きで書いており、その後、縦2行にしたり、横書きにしたりと自由度は高い。横書きの場合は、題字に限らずすべて左から右である。



（図3）創刊号表紙

創刊号の主な内容を4誌と同じように表にする（表5）。

表5 『暮しの手帖』創刊号の主な内容

エッセイ、写真記事	可愛い小もの入れ、直線裁ちのデザイン、ブラジアのパッドの作り方、自分で結える髪、エッセイ（18名）
衣服	左右同じ（シンメトリー）でないデザイン、自分で作れるアクセサリ、直線裁ち、服飾の読本
食事、料理	茶の間の手帖
読み物、小説他	ピーター・パン（お母さまが読んで聞かせるお話）、歌舞伎ダイジェスト、女の日記
生活情報	ちょっとした暮しの工夫、コロちゃんとテッデイくん（お母さまが作ってやれるおもちゃ）、指人形の作り方、すまゐのたしなみ、美しいヒフを求めて、お化粧品、アイロンのかけ方、コドモのあぶない病氣、育児おぼえ書き

他の4誌と比べて特徴的だといえることがいくつかある。①直線裁ちを提案していること。簡単に、誰でも手軽にとということが大橋鎮子の以下のことばからわかる。「もう型紙はいりません、夏物なら二時間、秋から冬のものでも四時間もあつたら出来上ります、どんないそがしい毎日を送っているひとでも一晩あつたら一着出来上りましょう。たゞ美しい、というだけでなく、簡単に裁てる、早く作れるということも、この「直線裁ち」の大きなよさの

一つなのです。」(第1号, p. 85) 他の4誌のうち、洋服の作り方を掲載しているものは、すべて、型紙を必要とし、直線裁ちに比べると複雑である。②18名ものエッセイを掲載していること。1人当たりの分量は2,000字弱から4,000字弱である。大橋は第1号のあとがきで「はじめて出す本で、どんなものが出来るともわからないのに、私たちの気持ちを買ってください、先生がたの、とてもいい原稿がいただけたことは、涙の出るほど、うれしかったです。」と記している。また、読者からの原稿も募集している。そこには、「四百字で十枚くらい」という指定がある。これらのエッセイがある分、小説などはない。③他の雑誌とは違うものにしたという気概が表明されていること。大橋は、同じくあとがきで、「この紙のすくない、だから頁数もすくなくしなければならぬときに、どの雑誌も同じような記事のせることはつまらない」と言い切っている。④多くのカットが使われていること。花森の手によるカットがたくさん使われている。他の4誌の場合は、内容理解を助けるための説明のためのカット、写真のかわりに使われているカットが多いが、花森のカットは、内容との直接の関係はないものがほとんどである。

『暮しの手帖』と他の4誌には共通点もある。巻頭に写真ページやカラーページが置かれていることや、文章や記事を描いた人の名前が記されていること。場合によっては、「本誌記者」とのみ記されていることもあるが、ごくわずかである。ザラ紙が使われていることも共通している。扱い方に違いがあっても、衣食に関することが中心になっていることも共通点だといえよう。

3. 『暮しの手帖』第1世紀100号までの題字

ここからは、花森による『暮しの手帖』の題字について考えたい。

3-1. 佐野繁次郎と花森安治の手描き文字

『暮しの手帖』100号までのうち、花森安治による装画表紙は1～43号、57号、93～95号、97～99号で、写真表紙は44～56号、58～92号、96号、100号のそれぞれ50号ずつである。写真表紙の場合も「表紙用写真は、タイトル文字を組み合わせるため、ものの位置を微妙に動かして、何かットも撮る。編集部員は、花森の一声で右に左に動いた。時間はかかり、深夜に及んだ。」（『花森安治のデザイン』p.44）とある。77号の版下の説明には「撮影後、写真や文字の位置、大きさを考えてデザインした版下。表紙の絵柄に合わせて、タイトルを手書きしている。」（前掲書p.47）とある。

花森の手描き文字について考えるためには、佐野繁次郎との関係、佐野繁次郎の手描き文字に触れないわけにはいかない。花森は、1936年から佐野繁次郎の仕事を手伝うなかで、佐野の影響を受けたと言われている。唐澤(2016, p.86)は、「花森が佐野さんから学んだのは、文字というモノは、絵のようにあつかうこともできる、という自由さだと思います。」と述べている。さらに、「花森の描き文字は、ハネヤトメ、文字の一画一画がとても丁寧なのです。そして、ヨコの画をひときわ細く、タテの画をひときわ太く、さらにハネヤトメも強調して描くというふうに、むしろ活字の明朝体をデフォルメして描いていると言ったほうがいいのかもかもしれません。おそらくそれは佐野繁次郎の薫陶だと思います。」(p.89) 南陀楼(2016, p.93-94)は「装釘のときの、活字の選び方、描き文字やイラストの配置の仕方が、なんとというか、スタンダードなものに従っていないんですね。佐野繁次郎の影響はあるにしろ、呼吸で学んでいるっていうか。全部が自分の生理の中で処理されている感じがしますよね。これは活字でいこうとか、描き文字でいこうとか、イラストを使おうっていうのも、ごく自然に決めている。」これらのことから考えると、花森が『暮しの手帖』の題字を手描き文字で描き続け、時には縦書き、時には縦2行、時には横書きとしたのは、自由さの表れであるとともに、装画や写真とのバランスを考え、その時毎に、そうでなければならぬ必然があったのだらうとも思われる。

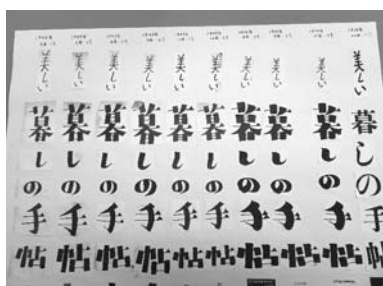
津野（2016, p. 129）は「花森の特徴的な描き文字は佐野のそれに酷似している」と言う。また雪（2017, p. 204）も「花森は佐野のもと、描き文字で語りかけるスタイルを築き上げていく」という。1936年から1941年に花森が佐野の元を去るまでの間の佐野の描き文字を『佐野繁次郎装幀集成』（2008）で見ると、戦後の佐野の奔放な描き文字とは違い、比較的整った描き文字だということが分かる。花森の題字は、この時代の佐野の題字と似通ってはいるが、「酷似」とまでいえるかどうか。佐野の題字は、縦横の線の太さが極端に違ったり、反対に太さがほぼ同じだったり、筆書だったり、漢字とひらがなの大きさが違ったりと様々である。しかし、どれも文字の配置が整っており、後年の描き文字の踊るような動きは見られない。唐澤の言にあるように、花森は自由さ、つまり、さまざまな方法を試みることを佐野から学んだと考えられる。戦後、佐野の題字は踊るようなりズミカルな文字になり、佐野らしさが強く感じられるようになる。この奔放で特徴的な手書き文字と、花森が手がけた装釘本の題字の手描き文字には確かに共通性が感じられる。また『暮しの手帖』の見出しにもそれを感じる。しかし、それは、必ずしも花森が佐野から学んだ結果だとは言いきれない。津野（前掲書）は1958年6月の佐野の装幀による『料理のお手本』と1972年6月の花森による『暮しの手帖』の中吊広告を比べて、「両者の系譜が感じられる」（p. 131）と言うが、花森は佐野の元を去ったのちまで、佐野の影響を大きく受けていたのだろうか。花森が佐野の元を離れて後、佐野は佐野で、花森は花森で、独自にそれぞれの装釘や描き文字のスタイル、デザインを作り上げていったのではないだろうか。

3-2. 第1号から第100号までの題字

花森の手描き文字は、縦書きの場合でも、一文字一文字が独立していることから、本稿では、花森の題字を1字1字縦1列に並べ、検討することとした。図4は、1号から100号までの題字である。なお、21号までは「美しい暮しの手帖」であり、22号から「美しい」が外れ⁵、「暮しの手帖」となった。

『暮しの手帖』第1世紀1号～100号の手描き題字をめぐって（守山）

また、花森のサインは、「H」のみであったり、「y.h.」「y.hanamori」「y.Hana」「yasuji hanamori」であったりと定まっていない。これについて唐澤（2016 a, p. 163）は、「花森さんは、じぶんのサインそのものを絵の一部にしている（中略）絵のバランスをくずさないように、注意ぶかく位置をえらんでサインを入れています。なかには、y と h を図案のように抽象化しているばあいもあります。」と述べている。



1号～10号



11号～20号



21号～30号



31号～40号

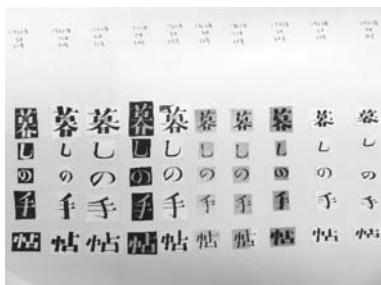
⁵ 酒井（2011）によると、「営業の横山啓一によると、花森は、表紙を描くとき「美しい」を書き忘れた、と言った。そして、つぎの号で「美しい」を復活すると、書き忘れたことがわかってしまうから、このまま、なしでいこう、と言ったという。花森のことだから、はじめから、なくすつもりだったのかもしれないが、表紙をめくると、目次は「美しい暮しの手帖」のままになっている。」



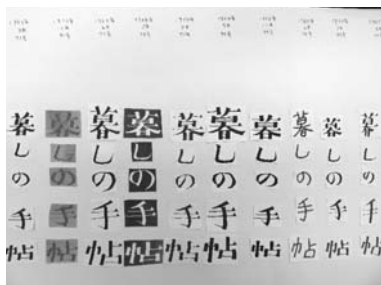
41号～50号



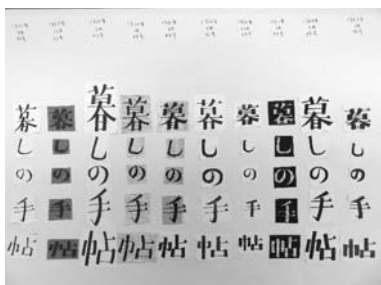
51号～60号



61号～70号



71号～80号



81号～90号



91号～100号

図4 題字『暮しの手帖』1号～100号

『暮しの手帖』第1世紀1号～100号の手描き題字をめぐって（守山）

花森は誌面のタイトルや見出しなどにも手描き文字を使っているが、題字はそれらに比べ特に、縦の線が太く、横の線が細く、飾り（ウロコ）がある。30号までは、縦線の太さがより強調されていることが多い。30号以降も、例えば「手」の縦線の傾き、曲がり具合などは違っても、基本的には縦と横の線の太さの違いがはっきりしているということや飾りがあることは変わらない。比較のために、明朝体、ゴシック体、教科書体、行書体、楷書体の各フォント例を使った「暮しの手帖」を表6に示す。漢字は、唐沢（前掲）が言う通り「明朝体をデフォルメしている」と言えよう。ひらがなはどうだろうか。漢字に比べ、バリエーションが多く、「し」と「の」のふたつのひらがなが、題字の表情を作っているように見える。明朝体のひらがなは、「筆で描かれたときのニュアンスが強く残っている」（MdN10, p. 35, 2017）のが特徴の一つであるが、その点も号によって、まちまちである。

表6 五つのフォントでの「暮しの手帖」

明朝体（MS明朝）	暮しの手帖
ゴシック体（HGPゴシックM）	暮しの手帖
教科書体（HG教科書体）	暮しの手帖
行書体（HG行書体）	暮しの手帖
楷書体（HG正楷書体 - PRO）	暮しの手帖

花森は題字の配置を考えながら表紙を描き、また写真撮影をしており、毎号、版下の段階で題字を加えていたことが、『花森安治のデザイン』（たとえばp. 53）を見るとわかる。装画の場合と写真の場合の題字に違いがあるということはない。唐澤（2016b, p. 15）は『『暮しの手帖』の誌名も花森の手描き文字だが、ロゴとしては固定化せず、しばしば変えていた。雑誌は発行するごとに新製品なのだから、誌名の文字も新しくすべきだと言っているが、

表7 同じ題字を使っていると考えられる号

号	題字の位置など
5, 6	左上から縦に配置。
8, 9	左上から縦に配置。8号は題字の下に余裕あり。9号はほとんどなし。手描きの第九号という形での号数は9号まで。
10, 11	左上に縦2行。10号は左上端四角に題字用スペースあり。
13, 14	はじめての横書き上左寄り。この後100号まですべて横書き。(除:15号)
19, 20	横書き上左寄り。
22~25	横書き上中央よりやや左寄り。
27, 28	横書き上中央。
30~43	30号以降、写真表紙に変わる前の43号まですべて横書き上左寄り。号数(数字のみ)が右に加えられている。
44~47	位置は43号までと同じ。
49~52	位置は43号までと同じ。
57, 58	57号は装画, 58号は写真。位置は43号までとほぼ同じだが文字が小さいため、題字と号数の間が広い。
66, 67	位置は57号とほぼ同じ。67号の版下に貼られている題字の下地の色が66号の表紙の色だということから、66号の題字を67号で使ったことがわかる(『花森安治のデザイン』p.54)。
94, 95	位置は横書き, 上, 右端に号数。 93号から99号までは、96号をのぞき、装画である。
98~100	98号, 99号の位置は95号などとほぼ同じ。 100号は写真表紙で、号数が表紙の中央に。

マンネリの印象をあたえなくなかったからであろう。」と言っており、雪(2017, p. 204) は毎号題字を書いていたと言っている。実は、唐澤が「しばしば」と言っている通り、毎号違ったわけではなく、100号のうち、2/3にあたる67号(67冊)は新たに題字が描かれているが、残りの33号(33冊)は、その前号と同じものが使われている(表7)。

最も長期間題字が同じだったのは、30号(1955年7月)から43号(1958年2月)である。44号からは表紙が写真表紙に変わっており、それまでの期間である。写真表紙に変わったことと、同じ題字が使われ続けていたことに関係があるか否かは分からない。このことについては何も書かれておらず1955

年から1958年にかけて、この時期に、特段のことがあったとも思われない。津野（2016）の「花森安治略年譜・書誌」によると、1955年だけが、その前後の年に比べ、記録に残るような活動がほほないことが分かるが、そうだとすると、それを題字の連続使用と結びつけることはできない。ただ、毎号題字を書いていたわけではないということだけは明らかである。

4. 学生との作業を通しての気づきと学生による研究の可能性

本研究では、『暮しの手帖』を学生の研究対象とする可能性について考えるためもあり、資料の整理などに学生アルバイトを雇用した。学生たちは単純な作業であっても、自らの手を動かしているうちに新たに様々なことに気づいたり、疑問を持ったりした。本稿では、花森の描き文字のうち、題字のみに注目したが、見出しの描き文字には題字とは違いがあり、さまざまな筆記具で見出しの描き文字を真似てみて研究のヒントを得ることもできそうだったと思われる。『花森安治装釘集成』には、花森が使っていた道具の写真があり、Crayolaが写ってる。たとえばCrayolaで文字を描いてみることから、花森の描き文字の味わいや特徴を探ることもできるだろう。唐澤（2016, p. 159）によれば、「花森さんは、描けるものなら材料はなんでも使いました。絵具は油彩と水彩を問いません。クレヨン、パステル、色鉛筆まで使いました。」と言っている。描き文字の材料を考えてみることもできよう。スタイルが様々な変化する表紙装画の分析の切り口もいくつも考えられる。

『暮しの手帖』には、直線裁ちのワンピースや、丁寧に作り方の手順が写真入りで示してある料理などが掲載されている。再現してみることで、70年前とは思えない斬新さに気づき、それを研究のスタートにすることもできよう。今回は、ひな型で直線裁ちのワンピースを作成してみたが、短時間で誰でも作れるということと決して古臭くないデザインだということを再認識した。また、現在の雑誌では考えられないが、さまざまな布の約3.5×4.5(cm)のサンプルを見開きのページに10枚貼ってある（第6号 p. 30-31）のを見る

と、単に付録をつけるのではなく、手作業で何かを組み込んだ雑誌を作ってみることも考えられるだろう。扱われている内容に注目することもできるし、内容やページの構成、文字表記などについて、時代を追ってみることもできる。現在学科が所有している1948年から1969年までの20年間に発行された第1号から第100号を十分に活用したい。

学科では、2019年度に、1年生全員が履修するグループ・プロジェクトで、『暮しの手帖』を使いたいと考えている。学生たちは『暮しの手帖』と向き合い、何かに気づき、発見し、疑問を持ち、答えを探り、そこから何かを作り出す面白さを感じてくれるに違いない。

おわりに

『暮しの手帖』は「この雑誌だけは一号からそろえて下さい」と繰り返し求めて無双帙の販売もしていた。そのため、学科で第1世紀100号をセットで手に入れることに困難が少なかった。それに対し、他の4誌は、1948年9月前後を20冊程度ずつ購入したが、ほとんどバラで購入するしかなく、また欠けが多く、1948年9月号はそろえることができなかった。本稿が1948年10月号を使用したのはそのためである⁶。

本稿では、題字に焦点をあてて検討をしたが、『暮しの手帖』については、花森自身や周囲の人々によって、出版のスタンスや内容構成のこだわりなど、多くのことが語られており、参考文献にあげた書籍からも『暮しの手帖』研究の切り口が多様にあることに改めて気づかされた。メディア・コミュニケーション学科の教員と学生の共通の研究テーマにふさわしいということに疑問の余地はない。今後、相互に助言しあい、刺激を受けあって研究を進めていきたいと考えている。

⁶ 4誌購入に当たっては、本学図書館に依頼し、インターネットを利用して20近くの古書店から『主婦之友』22冊『婦人倶楽部』21冊『婦人公論』18冊『主婦と生活』16冊の合計77冊を購入した。図書館司書小野氏の労に感謝したい。

本研究は、2018年度福岡女学院大学学長裁量研究費の助成を受けて行った。

引用, 参考文献

- 近江源太郎解説 (2010) 『配色辞典 大正・昭和の色彩ノート』青幻舎
- 唐澤平吉 (2016a) 『花森安治の編集室 「暮しの手帖」ですごした日々』文春文庫
- 唐澤平吉 (2016b) 「花森安治装釘集成おぼえがき 表紙にひそませた反逆精神と平和への祈り」『花森安治装釘集成』, 11-24, みずのわ出版
- 唐澤平吉×南陀楼綾繁対談 (2016) 「「花森安治の装釘」談義」『花森安治 美しい「暮し」の創始者』増補新版, 83-96, KAWADE 夢ムック
- 唐澤平吉・南陀楼綾繁・林哲夫編 (2016) 『花森安治装釘集成』みずのわ出版
- 河津一哉・北村正之 (2016) 『『暮しの手帖』と花森安治の素顔』論創社
- 暮しの手帖社編 (2011) 『花森安治のデザイン 『暮しの手帖』創刊から30年間の手仕事』暮しの手帖社
- 酒井寛 (2011) 『花森安治の仕事』暮しの手帖社
- 祖父江慎他 (2008) 『文字のデザイン・書体のフシギ』神戸芸術工科大学レクチャーブックス2, 左右社
- 辻克己 (2014) 『新装復刻版 現代図案文字大集成』青幻舎
- 津野海太郎 (2016) 『花森安治伝 日本の暮らしをかえた男』新潮文庫
- 中尾香 (2012) 「「主婦」を巡るパラダイム転換『婦人公論』と『暮しの手帖』」吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史』101-128, 森話社
- 中村幸 (2010) 「新しい女性雑誌『暮しの手帖』—戦後の生活への提言—」近代女性文化史研究会編『占領下女性と雑誌』216-254, ドメス出版
- 西村義孝 (2008) 『佐野繁次郎装幀集成—西村コレクションを中心として』みずのわ出版
- 浜崎廣 (2004) 『女性誌の源流 女の雑誌, かく生まれ, かく競い, かく死せり』出版ニュース社
- 二井康雄 (2016) 『ほくの花森安治』CCC メディアハウス
- 三鬼浩子 (2010) 「占領と女性雑誌—1945年から1949年—」近代女性文化史研究会編『占領下女性と雑誌』16-60, ドメス出版
- 屋名池誠 (2003) 『横書き登場 日本語表記の近代』岩波新書
- 雪朱里著, 大貫伸樹監修 (2017) 『描き文字のデザイン』グラフィック社
- 「絶対フォント感を身につける [明朝体編]」『月刊MdN』2017年10月号, 29-41